

# English Garden 第22話

"There was an old woman who lived in a shoe."  
Mother Goose

「靴に棲む老婆」(There Was an Old Woman)  
エラリー・クイーン

よく歌われているマザー・グースに、次のようなものがあります。

There was an old woman who lived in a shoe,  
She had so many children she didn't know what to do;  
She gave them some broth without any bread;  
She whipped them all soundly and put them to bed.  
靴に住んでたお婆さん  
子どもが多くててんてこまい  
パンをやらずにスープだけ  
ムチで打ってはベッドに入れた  
(藤野紀男訳)

この奇妙な唄の一部 "There Was an Old Woman" を題名にしたのが、表記のエラリー・クイーンのものである。しかも物語の最初の数章は、詩の1行ずつがタイトルとなり、状況が説明されていきます。

自分の腕一本で世界的な製靴会社を作り上げ莫大な富を築いたコーネリア・ポッツは「靴の宮殿」と呼ばれる豪邸に住み、権力をほしいままにしています。この邸には成長したコーネリアの子ども6人がみな住んでいます。しかし、現在の夫とのあいだの子3人は正常ですが、前夫とのあいだの3人は変人ばかりです。奇妙な化学実験に明け暮れる長女、子供じみた遊びに熱中しておもちゃに埋まっている次男、事あるごとに名誉毀損の訴えを起し、却下されては腹を立てている長兄のサーロー。今回サーローは自分で裁きをつけるという 銃を14挺買い込んだというのです。そこで犯罪研究家のエラリー・クイーンは、殺人を未然に防ぐため、この邸に入り込みました。(その晩の立派な晩餐にはパンはありません。コーネリアが医師にパンを禁じられているためです)



ところが、会社の経営に関するいざこざで、サーローと異父弟のあいだで決闘が行われるという事態になり、介添人を頼まれたクイーンは決闘用の銃に空包をつめておいたのですが、いつのまにか銃がすり替えられて異父弟は殺されました。さらに混乱の中で第2の殺人が起こります。そうした中でコーネリアは心臓の持病が悪化して死亡し、次期社長の選任と遺産相続の問題が表面に浮かび上がりました。真犯人の推理は遺言状の真偽とからんで進められ、意外な真実が明かされてどんでん返しの結末となります。

この作品は「マザー・グース殺人」と呼ばれるものの一つで、この唄のほかにも「そして誰もいなくなった」や「誰がロビンを殺したの」など数々の唄が作品の中に使われていて、マザー・グース特有の不気味な雰囲気を高めています。

なお、この物語はいとこ同士であるフレデリック・ダネイ (Frederic Dannay) とマンフレッド・B・リー (Manfred B. Lee) の合作で、作者名であり物語の中にも登場する「エラリー・クイーン」は二人のペンネームです。